

英語の「言語活動」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/32205

英語の「言語活動」

中 川 友 吉
米 沢 平 治*
岩 城 谷 滋**

I はしがき

1 本学部の教科教育研究会は昭和45, 46の両年度にわたって文部省の科学研究費をうけ、各教科にわたって付属校と共同研究を行ない、その結果は「教科教育研究」4, 5号に発表された。英語科は諸種の事情のためこの研究に参加できなかったが、研究費うちきり後も共同研究続行の方針が確認されたので遅ればせながら参加することにした。研究題目としては付属中学が数年にわたって「言語活動」について研究を行う計画があったのでこれを取りあげ、各学校において実地研究を行ない3回集まって討議した。この小論はその結果をまとめたもので、IIは米沢、III岩城谷、I, IV, Vは中川がそれぞれ執筆を分担した。

2 今回の英語科の学習指導要領改訂の大きな眼目として授業時数が4から3時間に短縮されたことと、各学年の内容設定の基本的な考え方のうち学習活動が言語活動と改められたことである。この事情について中学校指導書・外国語編(p. 22)は次のように説明している。

つまり、言語活動とは、言語を聞いたり、話したり、読んだり、書いたりすることなど、言語を総合的に理解したり表現したりするものである。したがって、英語学習指導の過程において、音声の練習をさせたり、文型の練習させたりすることもあるが、このような言語の一面についての練習は、言語活動の中には含めてはいない。

これに対して、言語活動は、音声や文型などを含めて、総合的に行なわせるものであり、言語の実際の使用につながるものである。

このような基本的な考え方の相違は具体的な学習活動、言語活動により明らかにされる。即ち旧指導要領の中学1年の学習活動の聞くこと、話すことに(p124)

- ア) 英語を聞きとらすこと。
- イ) 英語を聞かせ、これにならって言わせる。
- ウ) 英語を聞かせ、これに動作で答えさせる。
- エ) 英語を暗記し、暗唱させる。
- オ) 実物、絵画、動作について英語で言わせる。

- カ) 文の一部を置き換えて言わせる。
- キ) 文を転換して言わせる。
- ク) 英語で問答させる。

を挙げていたに対し、新指導要領では(P.128)

- ア) 日常慣用のあいさつをかわすこと。
- イ) 身近なことについて、話し、聞くこと。
- ウ) ある動作をするように言い、それを聞いて動作すること。
- エ) 身近なことについて、尋ね、答えること。

を挙げている。即ち、単に音声だけを聞いたり、真似たり、暗唱したりするア)イ)エ)や機械的な文型練習をするカ)キ)を外ずしてより具体的な状況を前提とする四つにしぼ

* 石川県教育センター研修指導主事
** 金沢大学教育学部付属高校教諭

っている。こうした変更の背後には戦後の英語教育を風靡して旧学習指導要領の柱になった構造主義の言語教育理論に対する反省とこれを批判する新しい言語理論に対する指向が見られるが、実際の言語学習の場で直ちに従来の学習活動がとり外せるかについては大いに異論があるようである。C. H. Prator, *Development of a Manipulation-Communication Scale* は機械的な manipulation と実際の言語使用に連なる Communication に分け、この各々をその程度によって更に2分して次の4段階に分けて考えているようである。

- 1) Complete Manipulation (CM)
- 2) Predominant Manipulation (PM)
- 3) Predominant Communication (PC)
- 4) Complete Communication (CC)

後田忠勝「言語活動のとらえ方」はこの scale を新指導要領に適用して次の配分基準を定めている。

(表一)

1) 聞き、話す領域

a) 1年 (言語活動)

- 1) CM
- 2) PM
- 3) PC ウ) ある動作をするように言い、それを聞いて動作する。
ア) 日常慣用の挨拶をかわす。
- 4) CC イ) 身近なことについて話し、聞く。
エ) 身近なことについて尋ね、答える。

b) 2年

- 1) CM
- 2) PM
- 3) PC 1年 ウ)
- 4) CC ア) 感嘆した気持ちを言い表わし、聞く。

(学習活動)

- ア) 英語を聞きとらせる。
- イ) 英語を聞かせ、これにならって言わせる。
- エ) 英語を暗記、暗唱させる。
- カ) 文の一部を置換え、キ) 転換して言わせる。
- ウ) 英語を聞かせ、これに動作で答えさせる。
- オ) 実物、絵画、動作などについて英語で言わせる。
- ク) 英語で問答させる。

- 1) 聞き、話す領域
 - a) Repeating just after the teacher → CM
 - b) Repeating after the teacher → PM
 - c) Dialog などの Recitation → CM or PM
 - d) Dialog の1部又は全部の書き換えの暗唱 → PC or CC
 - 2) 読む領域
 - a) Reading just after the model → CM
 - b) Double repetition reading の2度目の reading aloud → PM
 - c) Reading aloud through one part without the model → PC or CC
 - 3) 書く領域
 - a) Copying → CM
 - b) Dictation → PM or PC
 - c) 既習文型、利用単語例示 → PC
 - d) Creative composition → CC
- 更にこの規準で両活動を比較している。(表一)

} 1年に同じ。

c) 3年

- 1) CM
- 2) PM
- 3) PC 1年 ウ)
- 4) CC ア) 身近かなことを述べて、相手の念おをす。
イ) 身近かなことについて数個の文を用いて説明し、聞く。
2年ア) イ), 1年ア) イ) エ)

1年に同じ。

2) 読む領域 (省略)

3) 書く領域

a) 1年

- 1) CM ア) 語, 句, 文を見て書き写す。ア) 習字をさせる。
- 2) PM イ) 英語を見て書き写させる。
- 3) PC イ) 文を聞いて書き取る。ウ) 語のつづりを言わせたり, 書かせたりする。
エ) 英語を書き取らせる。
オ) 暗記して文を書かせる。
カ) 文の一部を置換えて書かせる。
キ) 文を転換して書かせる。
- 4) CC ウ) 身近かなことについて文を書く。

b) 2年

- 1) 1年 ア)
- 2) PM { 1年 イ)
- 3) PC { ア) 日本語の文の意味を英語の文に書く。 } 1年 ア) イ) ウ)
1年 エ) オ) カ) キ) ク)
- 4) CC イ) 行ったことなどを文に書く。ク) 既習の文型を用いて日本語の意味を英語で書き表わせる。
1年 ウ)

c) 3年

- 1) CM 1年 ア) } 1年 ア) イ) ウ)
- 2) PM { 1年 イ) } { 1年 エ) オ) カ) キ)
- 3) PC { 2年 ア) } { 2年 ク)
- 4) CC ア) 行ったこと, 考えたことを数個の文に書く。ク) 日記や手紙を書かせる。
イ) 日記形式, 手紙形式の文を書く。
2年 イ) 1年 ウ)

3 「言語活動」に関してこれまでに発表された実践例の大部分は中学におけるものである。構造主義の理論の上にたつ従来の学習が基礎的な manipulative 的要素の多い中学に発達した歴史から見て当然であるが, communication を中心とする学習は高校, 大学に重点が移ってもよいのではなからうか。我々の中学—高校—大学の3部門にわたる共同研究の狙いの一つもそこにあるのであって, どの部門においてどの領域の活動がどの程度行い得るかを実践を通して見ようとするものである。

文部省 中学校指導書・外国語編 昭45
 “ 中学校外国語〔英語〕指導書 1959
 後田忠勝 言語活動のとらえ方 1972
 堀口俊一(編)言語活動の理論と実践 昭46

II 中学における「言語活動」

1.1 はじめに

昭和48年に「Creative な表現能力の向上を求めて—主として1学年の書く能力を対象にして—」という題目で, ささやかな研究を付属中学校研究紀要第15号に掲載した。然るに今度, 新指導要領の中で学習活動から改められた言語活動は, 「言語を総合的に理解したり表現したりする活動をさすものであり, それは言語の実際の使用につながるものである。」と定義されている。これは creative な表現能力の向上を目差すことを含むものであると受けとめられ, ここで旧研究を新しい角度から上記主題のもとで一歩前進させたいと思う。

2) 主題の説明

Creative な書く能力とは文字通り解釈すれば, 思ったことを自由に文章表現する能力といえる。しかし中学校の段階としては, 究極の達成目標からいえば, 生徒がまず書く必要や書こうとする意欲をもち, 自

分の生活経験の中から, 既習の語い・文型・文法事項を運用して書き表わせるものをいくつか選んで表現する能力としたい。そしてそれに到達する過程としては control されたシチュエーションのもとで, 生徒が既習の語い・句・文の中から選択して再現する能力で満足すべきだと思う。このような能力向上のために「書くことにおける言語活動」をいかに展開させたらよいか, いくつかの点について研究したい。

3) 新旧指導要領の比較

「書くこと」の言語活動(新)

- (ア) 語, 句および文を見て書き写すこと。
- (イ) 文を聞いて書き取ること。
- (ウ) 身近なことについて文を書くこと。
- (エ) 日本語の文の意味を英語の文に書くこと。(2年より)
- (オ) 行なったことなどを文に書くこと。(2年より)
- (カ) 行なったことや考えたことを数個の文に書くこと。(3年より)
- (キ) 日記形式や手紙形式の文を書くこと。(3年より)

「書くこと」の学習活動(旧)

- ㊦ 習字をさせる。
 - ㊧ 英語を見て書き写させる。
 - ㊨ 語のつづりを言わせたり, 書かせたりする。
 - ㊩ 英語を書き取らせる。
 - ㊪ 暗記した文を書かせる。
 - ㊫ 文の一部を置き換えて書かせる。
 - ㊬ 文を転換して書かせる。
 - ㊭ 既習の文型を用いて日本語の意味を英語で書き表わさせる。(2年より)
 - ㊮ 日記や手紙を書かせる。(3年より)
- 上記を比較してみると, 学習活動の㊦と㊧は言語活動の(ア)に, ㊨と㊩は(イ)に精選集約されていると解される。また学習活動の㊫, ㊬および㊭は, (ウ)「身近なことについ

て文を書くこと」, (㊦)「行なったことなどを文に書くこと」および, (㊧)「行なったことや考えたことを数個の文に書くこと」の言語活動の準備作業ともいえよう。残りの㊨と(㊩), ㊪と(㊫)は表現が少しあらたまっているに過ぎない。以上からみても分かるように, 学習活動が消えて言語活動が入って来たのではなく, 言語活動は学習活動+αをねらっているようである。なお今回の研究は・印のものを中心に実施する。

2.1) 指導内容の学年別基準表

指 導 内 容	1 年	2 年	3 年
a) 実物・絵・動作などについて英語で言わせた後書かせる。(1文だけでなく2つ以上の文へと発展)	◎	○	○
b) 英語の質問に英語で答えさせた後, 書かせる。(1文だけでなく2つ以上の文の答えと発展)	○	○	◎
c) 与えられた語句を使って文を作らせる。	○	◎	
d) 与えられた語句の意味を英語で書かせる。	○	○	
e) いくつかの英文を適当な順序に並べかえてストーリーを作らせる。(絵や日本語のヒントを使うこともある。)	◎	○	
f) 参考文を与え, 身近なことについて条件つきで書かせる。	◎	○	○
g) 参考文を与えず, 身近なことについて条件つきで書かせる。	○	◎	○
h) 身近なことについての対話を聞く, 話す, 読む練習をへた後, 文に書かせる。(f, g, hには TV 番組を利用することもある。)	○	○	◎
i) 身近なこと(学校生活, 家庭生活, 社会生活, 自然, その他)について書かせる。	○	○	○
j) 他人の行なったことや考えたことについての対話を聞く, 話す, 読むの練習をへた後, 追体験として文に書かせる。	○	◎	
k) 行なったことなどを文に書かせる。	○	○	
l) 行なったことや考えたことを数個の文に書かせる。	○	○	
m) 日記形式や手紙形式の文を書かせる。	○	○	

上記の表に示されている学年別の重点(○→○→◎)は過去の指導経験をふまえて, 大ざっぱに示したものである。しかし基本線としては, 新指導要領に学年区分をして示されている指導内容 i), k), l), m) を取り上げる前に, 準備段階として表中の残りの指導内容につき, 十分な指導を加えることにしている。そして k), l) を取り上げる時にも, いきなり書かせるのではなく, What did you do last Sunday? (2年) How did you enjoy your "Golden Week"? (3年) 等ではじまる一連の問答練習を十分に積んだ後, 文に書かせている。なお今回は, 指導例を表中の下線を施したもののみにして示す。

2) 指導例と検討

① 参考文を与え, 身近なことについて条件つきで書かせる。(TV番組利用) — 1年 My Family 9/30録画—10/2VTR再生

上記番組の視聴内容中, とくに家族の名称の言い方, それぞれの持ち物やペットについての言い方を練習する部分を想起させ, 次時10/5に下記の課題をやらせる。
課題 下記を参考にして, あなたの友だちの1人またはペットを紹介して下さい。

This is John. He has a good racket. He likes it. He plays tennis with me.

注: 1) 既習の文型, 語いを使用し, 用法, 綴りに自信のない未習のものは, できるだけその使用をさけること。

2) be動詞 (is, am, are), have動詞 (have, has), 一般動詞 (be, have 動詞以外の動詞) 2種類以上必ず 使用すること。

3) 文は 8つ 書くこととし, 内容的にも全体としてまとまりがあるように並べること。

・TV視聴に加えて参考文を与えたり, ま

た条件を細かく規定すればするほど、生徒が自由にのびのびと書く面は少くなるわけであるが、中学校段階（特に1年生）としては致し方もないと思う。しかし生徒は画面を通して指示された生々しいサンプルを想起し、参考文だけにたよるのところが、意欲をもって書いていることがうかがわれた。

② 身近なことについての対話を聞く、話す、読む練習をへた後、文に書かせる。

a) 身近なことの中に含まれる社会生活を更に広げて国際生活の中の他国の事情について（TV番組利用）—3年 English for You の中 My Country, My Town シリーズ(1)Holland 5/2録画—5/12, 17, 26VTR再生（CD組, B組, A組の順に）

視聴後、下記の質問を与え、理解度を点検する。—答えは日英どちらでもよく、完全なものを要求しない。

- 1) What is Holland famous for? 2) Are there many mountains in Holland? 3) What does Holland need most now? 4) How large is Holland? 5) How many languages can they [the Dutch people] speak?

結果 平均2.9点 5点取ったもの20名(178名中)

時間の最後にプリント（モアー氏とゲストによる Holland についての対話の一部—後述）を渡し家庭学習を指示する。

6月26日 下記の課題をやらせる。

(They do clean very much. のみ説明して)

Holland について10の文で説明しなさい。

評価基準	{	間違ったの数 0 ……10点
		“ 1～5 ……9点
		“ 6～10 ……8点
		“ 11～15 ……7点
		“ 16～20 ……6点

結果 平均7.9点 10点取ったもの20名(176名中)

・下記の接続詞などを使ってプリントにならない文を作成している。()内は文の数 because (48), so [So] (48) as (16) so ~[~]ので ~that (11) 関係代名詞 (10) though (4) (未習)

,fof (2) 倍数の比較as~as (1) not (未習) only~but also (1) 同格名詞 (6) By (未習) the way, (7) その他 because, asを誤用したもの (9) 計 163

・既習の文型、語句を利用しているもの 受身 (4) 現在完了 (1) 現在完了進行形 (2) 付加疑問文 (1) It~thatの強意用法 (11) —オランダが必要とするものはもっとたくさんの土地です。6/8 総合テスト 出題ずみ allow+目+不定詞 (1)

make friends with (2) opened the door to (1)

・考えたことを書いているもの オランダへ行きたいとか、風車を見たいとか (would like to を使っているものが多い) 表現しているもの (12), チューリップについて書いているもの (4) …

以上からいえることは

・家庭学習が徹底したのか、綴りの間違いはあったにしろ、成績は可成り良かった。

・,so [So] を誤用したものがないのは日本語の語順と同じためかと思う。

・特に指示されなくても、生徒が思い思いの接続詞などを使って、プリントにない文を作成しようとした試みは、たとえ英文総数の約一割にみたなかったにしろ、望ましい傾向だと思う。この傾向は、今後生徒の馴れや、課題の出し方の工夫いかんによって急速に高められるものと信ずる。

・既習の文型・語句を利用したもの、および考えたことを書いているものが非常に少ないが、これらの傾向についても上記と同様のことがいえると思う。

On Holland

A: You know much about the history between Holland and Japan, don't you?

B: Yes, I do. About 400 years ago, we began a long friendship with the Dutch people.

A: What is the capital of Holland?

B: Amsterdam is. It's a very old city. It's a big port, too.

A: Are there many rivers or canals in Holland?

B: There are many canals.

A: Is Holland a very clean country?

B: Yes, it is. They do clean very much.

A: What is Holland famous for?

B: It's famous for its windmills. But most of them aren't used any more. They are just pretty. Many people go to look at them.

A: Are there many mountains in Holland?

B: No, there aren't. Holland is very flat.

A: What are they trying to do most now?

B: They are trying to make more land. There are many people in Holland, so they need much land.

A: How large is Holland?

B: It's only as large as Kyushu.

A: What is the population of Holland?

B: It has 30 million people.

A: How many languages can they speak?

B: They can speak four languages. They are Dutch, English, German and French.

A: Why can they speak so many languages?

B: Because there are so many countries around Holland.

生徒の答案から（9点取ったものの中から——間違った箇所には下線を施してある。また Dutch people の前に the が必要）

Japan and Holland began a long friendship about 400 years ago. It's capital is Amsterdam and this city is an old port. There are many canals in the country. Dutch people cleans their own country very much. Holland is very flat and there aren't many mountains. The population of Holland is about 30 million. But the country is just as large as Kyushu, so they need more land. Dutch people speak four languages, Dutch, English, German and French, for there are many countrys around Holland. Holland is famous for its windmills, but they aren't used any more. They are so pretty that many people go to look at them.

b) 身近なことの中に含まれる自然の中の動物について——3年

下記の対話を十分に練習させた後、その内容に関して数個の文にまとめさせる。

Panda



- A: What's this animal?
 B: It's a panda.
 A: What family does it belong to?
 B: It belongs to a bear family.
 A: What color is it?
 B: It's black and white.
 A: Where do pandas live?
 B: They live in the highlands of Tibet and China.
 A: What do they like?
 B: They like honey.
 A: What do they eat?
 B: They eat bamboo leaves.
 A: How many pandas are there in the zoos of China, North Korea, England, Russia, and America?
 B: There are only 20.
 A: How many of them live in the zoo at Washington D. C. ?
 B: Two of them do.
 A: When President Nixon visited China, who gave him the two pandas for the American people?
 B: Chou En-lai did.

課題 Panda について 8つ以下の文で説明しなさい。指示 各自 panda について考えていること、感じていることをつけ加えてもよろしい。

評価基準 (目安の程度)

文は 6つ以上、間違いの数 0~2 a°
 " " 3~5 a
 " " 6~15 b

上記以外のもの c

結果 a° (50名) a (44名) b (55名)
 c (25名) 174名中

○プリントの内容を越えて、パンダはかわいい動物であるとか、パンダが日本の動物園にいないとか、パンダは珍しい動物とか……表現しているもの——85名

○綴りの間違いはさておいて、共通的な間違いとしては、日本語の発想からくるもの

——The are only 20. Panda's doll, such a few animals 文法的なあやまり——of [in] all over the world, is belong to その他珍らしいの意味に important を使用している。……

・指示の仕方にもよるが、自由にのびのびと書いた答案が多くなった。その反面間違いも多くしかも多岐にわたり、評価は到底点数では不可能となった。また事後指導も徹底さを欠く。

生徒の答案から (プリントの内容を越えた文の中から)

- 1) There are no pandas in Japan. 又は We have no pandas in the zoos of Japan.
- 2) They are black and white, and they look funny.
- 3) Some people like pandas very much, because they are very lovely.
- 4) I saw a white and black animal eating bamboo leaves.
- 5) If they come to Kanazawa, I will go to see the pandas every day.
- 6) We think that we have to keep lovely animals from pollution.
- 7) When Tenno visited England last year, he was very glad to see them at the zoo in London. I like them, too, but I've never seen real pandas.

③ 他人の行なったことや考えたことについての対話を聞く、話す、読むの練習をへた後、追体験として文に書かせる。—3年

下記の対話を充分練習させた後、対話中のBになったつもりで、新幹線に乗った経験 (この場合は追体験となる) を3つ以上の文で書かせる。

Shinkansen

- A: Have you ever ridden the new Tokaido line?
 B: Yes, just once, a couple of months ago.

A: How did you like it?

※B: Frankly, I didn't like it very much. It's fast and punctual, but I didn't have a chance to buy a lunch at a station on the way.

指示 1)各自が自分の経験を書くのでなく、Bの経験を書く。2)現在完了形と just once はいっしょに使用できるが、a couple of months ago, a few months ago, two months ago はいっしょに使用できない。

結果 平均3.3点 5点取ったもの47名 (177名中) (冠詞の有無, 単語の綴りの間違い等は目に見る)

・下記の接続詞を使って上記※の答えを新しく組みかえている。()内は文の数 because (55) ,so [So] (10) but (10) when (4) so~that (2) though (1) as (1)

その他上記を誤用したもの because (12) —I didn't like it very much, because it's fast and punctual. but (4) ,so [So] (2)

・自分の経験を書いているもの(25名)感じたこと,考えたこと,例えば,おなかがすいたとか,何と速いでしょうか…表現しているもの(7名)

・半数近くの生徒が接続詞を使って新しい組み合わせをやっているのは望ましい。

・becauseの誤用は読解力の不足からきていると思う。

・自分の経験を書いた生徒がいたのは指示の不徹底か。

・感じたこと,考えたことを書いた生徒が少なかったことは指示のしかたによる。

・結局のところ積極的な言語活動から非常に程遠いものとなったが,共通の内容について書かせたので,評価は比較的容易その上,事後指導も可成り徹底する。

生徒の答案から(5点取ったものの中から)

a) I have ridden the new Tokaido line just once. I rode it a couple of months ago. It was very fast and punctual, but I didn't like it very much. Because I didn't have a chance to buy a lunch at a station on the way.

b) I rode the new Tokaido line just once, a couple of months ago. I found it fast and punctual, but I didn't have a chance to buy a lunch at a station on the way. So I didn't like the new Tokaido line very much.

3 むすびと今後の問題

・比較的わくを強くして書かせるものと,比較的自由に書かせるものと二本立てか。

・「書くこと」における言語活動展開の前に,聞くこと・話すこと・読むことにおける言語活動指導の徹底。

・指導内容の学年別基準表にのっとって,長期的に計画的に実施する。

・最後に4つの必要事項をかかげて発表を結びたい。1)教師の強いcreativeな書く能力 2)教師の日頃の研さん努力 3)教師の生徒が何を求めているかを洞察する能力 4)言語活動の効果を信じて何が何でも生徒にやらせること

III 高校における言語活動

1 まえがき

1) 英語を母国語とする国で生活する場合の言語活動の成長

四六時中英語で話されている環境に生活する場合,全ての社会活動は英語を媒介として伝達され行動されており,見聞するのは英語を切り離しては理解できないし,社会生活はおくれない。その中に生活しなければならなくなった日本人高校生の言語活動の成長を想定してみると,学校の全ての教師,級友,あるいは宿の人達は,いつ

までも彼のために特に配慮して、わかり易くゆっくりと英語をしゃべってはくれないし、書かれた文字も全ての本国人と同様に厳然と彼に読解をせまってくるのであるから、最初の一週間は不安と絶望、困迷のうちに過ぎさってしまうだろう。これで彼がノイローゼになってしまえば別だが、そうでなく、勇敢に生活し、わからないことはわかるまで反復して問い、わからない文字はわかるまで辞書を頼りにしたり、直接問い正したりして、わかろうと努力する時、彼は1か月もするとかなりの程度に理解力をつけることは間違いないだろう。そして半年もすると、意志の疏通が計られる位にまで上達するだろう。その例は我々のよく耳にするところである。

さてここで注目すべき点がいくつか考えられる。勇敢さと努力はさることながら、一番大きな特徴は、彼の母国語である日本語の使用が皆無であり、彼の環境と教材の全てが英語を伝達手段として彼に働きかけており、その中であって、短期間のうちにある程度の英語の理解力と言語活動力を備えたという点である。そしてもう1つ大きな特徴は彼の耳にする英語は生きていて、その英語に対して確実に彼の眼前にその対象物があり、現象があるという点である。だから耳にする英語と対象物との間には大きな距離はなく、彼のイメージーションは直感性をもつこととなる。対象物や話し手の身振り手振りが彼のイメージーションにとってどんなに助けとなったかを思うと、そのことは彼の理解力の養成に大きな要素を占めているとっていいだろう。その成長の過程をもっと分析してみると、彼は耳にするもの全てがわかるわけではなし、その一部がわかって何について言われているのかもわからないことだし、まして、その何かがどのように言われているかもわかりはしない。わからないから、彼の反応は一言も発しない状態を続けることと

なる。しかし、ここで見逃してならないのは、彼の耳にしてきたことが、彼の記憶にそのいくばくかが眼前の現象と共に「残され、積み重ねられている」ということである。この積み重ねられてきた知識はまた既習の知識と共に次回に耳にする英語に対して、かなり反応を示すこととなるだろう。この反復が彼の英語の理解力の養成にまた力となると考えられる。

2) 聞くことと話すことの領域

耳にする英語が理解できるためには、話される英語を受けとめるだけの既習の知識がなくてはならない。それは読解する場合も同じであるが、もう1つ大事な点は、話される英語を理解するためには、その英語を確実に受けとめる判別力と慣れが必要であろう。簡単に判別力と言ったが、この判別力を身につけるためには、単語それぞれの発音、単語を連ねた語群のとらえ方、リズム、イントネーションなど、また文章として全体的なとらえ方、そして、その文意をつかむつかみ方など、いろいろの知識を備え、それらが自在に有機的にかみあって判別できるような力をつけなければならぬだろう。

また一方において、話す活動としては、英語を話すためには自分のもっている英語が自分の伝えたい意志、思想、感情などを的確に表現できる位に組み立てられなければならないし、そのためには組み立てて、その上で、瞬間的に口をついて発表できるだけの技能がなければならないだろう。自分のもっている英語が、また、必ずしも思いのままに常に簡単に口に出てくるとは限らないし、普通は知っている英語のうち、ごく少数の単語しか口には出てこないものである。そして一番大事なことは、相手に問われた場合に応答がいき、説明しなければならない時に説明ができ、意見を述べなければならない時に意見が述べられ、わからない時にはそのわからない点を質問でき

なければならぬし、感じた情感を述べたときは、それを述べられるようではなければならない。しかし、何よりも相手のしゃべったことがわからない限りは話は始まらないわけである。

3) 教室英語の言語活動の領域

教室英語の言語活動はどうあったらよいのかについては、これまでいろいろ取沙汰されてきている。Oral Method, Oral Approach, Audio-Visual Method 等々いろいろな学説が紹介され、導入されてきたが、その効果についてもいろいろあげられてきているものの、日本国内の高校英語教育の学習過程を修了した生徒が必ずしも一様に英語を自在にしゃべれるわけでもないこともまた厳然たる事実である。あそこの高校を卒業した生徒は皆うまく英語をしゃべることができるといった風評を耳にしたことは一度もないし、誰もそんな高校があると信ずるものはない。この事を批判して、よく外人は、一体どんな教育をしているのかと不信に思っただけで、質問するわけだが、いたずらに、どうにもならない事情があったとか、大学入試に支障があるとか、読解がなければ理解できない文章の学習を棚に上げて、音声学だけに集中するわけにはいかないとか、言語活動は難かしいからその問題は大学でやらしてもらえばよいとか、いろいろ理由を述べるだけで、決してその外人を納得させているわけではない。しかしそう述べてはいるにしても、それぞれの学校で決して言語活動をしていないとか、部分的な練習さえもしていないとか、言っているのではなく、皆それぞれにある程度の練習はしているのである。

文部省告示第281号（昭和45年10月15日文部大臣坂田道大）によると、昭和48年4月1日から施行される高等学校学習指導要領（改正）は、その第2章第7節外国語において次のように述べている。第2款第3英語Bの1の(1)で「英語の音声および基本

的な語法に慣れさせ、聞き、話す基礎的な能力を伸ばす。」その内容については、次いで2の(1)の「ア」で――

- (ア) 日常慣用のあいさつをかわすこと。
- (イ) 身近なことや行なったことなどについて、話し、聞くこと。
- (ウ) 身近なことや行なったことなどについて、尋ね、答えること。
- (エ) ある動作をするように言い、それを聞いてその動作をすること。
- (オ) 感嘆した気持ちを言い表わし、聞くこと。
- (カ) 身近なことなどを述べて、相手の人に念を押すこと。

――と具体的に指示してある。これで見ると、その目標や内容は基礎的で初歩的である。その限りにおいて前述の外人の疑念を幾分晴らすだけの根拠はあるわけだが、勿論それだけで良いとは誰も考えてはいない。高校3年間で耳にする英語の言語活動は、高校生が肉体的に精神的に成熟しつつあるにもかかわらず、英語を母国語とする同年代のそれと比較すると、子供の言語活動の域を出るものではない。家庭の学習、教室の学習を加えた音声練習の時間の累積は微々たるものである。この状況でどれだけの言語活動が期待できるのだろうか。設定された状況の中で、できるだけ生徒に英語を聞かせ、音声的に受け入れる能力の育成を計ることが大切であることは異論のありようがないし、話すことへの能力は、数多くの耳にした英語の中からこそ自然に出てくるものと考えたい。ところが現場の英語教師が生徒に聞かせることのできる英語には自ら限界のあることも否定できない事実である。L.L.装置、V.T.R.の利用もあるが、これらの利用は個人差のあることも否定できないし、また、これらを利用する前に生徒に与える材料の準備、編集も単調に流れてもならず簡単なわけにはいかない。

Wilga M. Rivers も Robert Lado や

Charles C. Fries も述べていることだが*、学習する生徒側も習熟するまで時間をかけて練習し、応用する練習を積まないことには、教室英語の効果はあまり期待できない。そのためには、現在使用しているL.L.に生徒自身のカセットテープを使わせ、自宅でも練習できるように配慮することもその1つであろう。

次に本校の実験的な一試行を考えてみたい。

2 本校の場合

いわゆる作品講読といえ、訳読が主流を占めてきているが、この訳読に代えて、英読（英文を音読して、意味をつかむ読み方で、そこには和訳の過程がない）し、難文の所では他のより平易な英文で考え、質問も応答も Oral Method でやってみる方法はとれないのか実験してみたかった。この方法によれば単なる英語の言語活動のために用意された Pattern Practice の単調さと退屈を避けることができるし、行き詰まることもないだろうと考えた。作品を通して質疑応答する場合の言語活動は、作品の生の材料が眼前にあり、生徒の予習を経た材料でもあるので、内容の一貫した授業展開ができるわけである。生徒の立場からは、内容の理解度を計る英問が出されると、そのイマジネーションがぴたりと合致し、応答も比較的楽にできる。いわゆる Direct Method という Pattern Practice や Oral Method, Oral Approach などよりもっと源流をなすような方法があるが*、この Direct Method に近い方法を模索し、英語の言語活動に従来にない効果的な長所があるものか調べ、欠点はどうかも調べてみようとした。

この方法で授業を展開すると、数多くの Questions & Answers があり、英語による説明の聞きとりがあるわけだが、生徒が応答する英文のできばえ、長短は、特にそのための Pattern Practice がないだけに千差万別であることは仕方のないことである。この個人差は別として、ここで問題となるのは、英語で話そうとする時、生徒は誰しも言語活動の練習はしていても言語生活までしているわけでないで、瞬間的に口をついて次々と英語がしゃべれるわけではない。これは当然なこと、これ以上のことは考えない。この英語で話す場合、思想感情を自分の既知の英単語と用法の駆使によってできるだけ早く英作文しながら発表する過程がある。この過程の時間を短縮することが生徒に課する練習であり、言語活動であるとして本論を進める。そのために期限付の課題作文を書かせ、それをスピーチ形式で発表させ、これを繰り返し、free talking させて行けば、言語活動はかなり成果があがるのではないか。

1) 本校の実体

本校は第1学年の副読本の時間に言語活動を実験した。使用教材は André Maurois 原作の Lucille Harrigan が adapt した Lafayette In America である。この物語はアメリカ独立戦争時に丁度青年期を迎えた弱冠19才のフランスの貴族ラファイエット侯爵が独立軍に味方して、祖国を離れ、いかに奮戦したか、それにいかに独立軍の勝利に貢献したかを述べている血気と信念と行動の物語である。使われている英文は、中学3年間の英語力を引継いで高校で学習する段階のものとしては、程良いもので、新出単語もかなり押えてあり、やや難かしいといえ、文章の長さがかなり長くなっている程度の94頁からなる物語であ

* Wilga M. Rivers : Teaching Foreign-Language Skills ('70) P.210(頁1)

Robert Lado & Charles C. Fries : English Pattern Practices ('69) P. XV(頁2)

* 「英語教育」1973年3月号18~20頁伊藤嘉一論

る。

1972年の新学期の4月はこちら側の発音に慣らすことにむしろ時間がかけられ、進度も遅々としていたが、5月からは進度を速くした。Questions & Answers の評価はこちらの質問の意味がわかって、それに応答する即応性と適格性をみて、一応の基準とし、これを普通の段階とした。応答が適格である上に応答内容が要点に触れるのみにとどまらず、それ以上のものが発表できる段階を秀逸とした。これによると speaking の速度、発音、イントネーションは評価の対象から外された感があるが、実際は訂正、補足を加えながら指導する時、あまりに注意を頻繁にすると反って生徒の意欲を減退させることを恐れ、それにこちら側の限界もあることから、第二義的に扱った。特に目立った間違いを訂正するにとどめた。全体(3クラス)の80%が普通で、15%が秀逸、残りはやや戸惑いながら、簡単な応答をするものであった。これが小テスト^(※3)ともなると、紙の上で writing する余裕が与えられるので成績は一層秀れたものとなる。テスト内容は英問英答が2問、Dictation と訳が2問、新出語句を与えた上で自由作文させるのが2問、綴りとその意味が8問であるが、90%以上の得点をとるものが全体の39.2%を占め、77%以上の得点者は全体の69.1%に及んでいる。50%の得点もないものはほんの僅かである^(※4)。しかしこのテストは聞きとる能力を調べたにすぎないが、学習したことについて問う場合聞きとる能力に関しては、予定された線に沿ってのびていいって良い。試験があるから勉強せよとは予告しないで、突然行なった結果である。

2) 課題作文とスピーチ

第2回目の小テストを終了してから、約2週間の期限を与えて、作文提出の宿題を与えてみた。これは聞いた英語に即応して英語が発表できるようになるためには、思

ったこと、感じたことを平易な英文で作りに合わせながら発表する練習を時間をかけてさせることが必要だからである。言語活動で2つも3つも節をつなぎ合わせた長文を発表する時の苦労はどこにあるのか、この時間をかけた作文の作業からつかみとらせようとしたためである。提出された作文の題目は、丁度授業中に使用している教材の中に a perfect horse (申し分のない馬; 理想的な馬) が出てきたので、その perfect を使った語句を題目にして自由に作文するように指示し、条件として、決して日本語による作文を作ってから後に、これを英訳することのないように、和英辞典はどうにもならない時にしか使用しないように、そして、人に作ってもらったり、みてもらったりもしないように指示した。そしてレポート用紙で少なくとも2枚以上提出することが望ましいともつけ加えた。提出された作文は、135名の在籍者中126名が提出し、9名(うち男子8名)が提出しないという結果になり、それぞれ2枚以上、多いのは5枚も書いているのがあった。

思うこと、感ずることを節を使いながらも簡明に書きあげているものを②と評価し、大差はないがやや劣るものをaと評価し、普通だと思われるものをbと評価し、劣ってまずいものをcとした。これによって、②は126名中18名、aは80名、bは28名、cは0名という結果がでた。全体的にみて、文法的な誤りを犯しているものが結構あったが、みんなかなり上手に言いたいことを作文したとの感想をもった^(※5)。誤りについて共通にいえることは、既知の知識を、しかも基本的な知識を知ってはいても、かならずしも活用する面で、生かされきっていないということである^(※6)。知識に習熟するだけの練習の不足と、細心の注意を払うことの意識の不足である。言語活動の Questions & Answers までさほどでない誤りも、一たん教材を離れて自由に作

文をしてみると、教材の英文が対象とならないだけに、なお新しい問題がでてきたわけである。文法的な誤りを各作文の紙上で指摘し、訂正したことは勿論だが、共通した誤りについて注意を促すために OHP を使って、クラス全体の生徒に1時間の講義を行なった。また一方、教材学習中に折にふれ基礎的な知識の問題点の再認識、練習を加えることにした。今回の作文は宿題であって、決して限られた小時間内で作らせたものでなかったが、授業中の1時間で作文させた場合のように英文で表現できるか。果して宿題の場合と同様のまたそれ以上のものが期待できるか。(この点については別稿で述べることにする)

かなりの程度に英文表現ができる能力を oral ですぐにも口をついて発表できるようになるのが理想的な姿であるが、この難かしいかなりの距離をどのようにして短縮して行けばよいのか。とにかく訂正された作文をクラス全員にスピーチ形式で発表させ、その内容について Questions & Answers をさせてみた⁽²⁷⁾。自分の作った宿題の英文は、果してどのようにしゃべることができるか、それを聞く他の生徒諸君はまたどのように聞きとめ、理解してくれるだろうか。原稿を見ながらしゃべる人、終始原稿から眼を離さないでしゃべる人、全然原稿を見ないでしゃべる人等いろいろあったが、時々原稿を見てしゃべる人の方がどちらかといえば多かった。今回は④の評価を受けた人だけがしゃべったので、全体の人のスピーチの練習にはならなかったが、④の人が、自分の作文をどの程度にわかり易くしゃべれるものかを調べるのには良い機会だったと思われる。聞きとる生徒の立場からみると、聞く内容が初めて耳にするものであり、予習した日頃の教材と違っているので、判別し理解するのがなかなかうまく行かなかった。話す立場のものは、教科書の英文を読むように話して

いては理解されないことを知らされた。感情を交えたイントネーションがどんなに大切なことか、また区切りをつけながらわかってもらおうとする努力がどんなに必要なことかも体験したわけだ。④のものが口をそろえていう言葉は、以上の外に、とても良い経験だったということである。

前もって内容について知らされていないのをそれぞれの発音、速度を通じて聞かされるわけだから、その練習の少ない欠点がいかに出てしまったわけである。予め学習した教材の内容について質疑応答するのはかなり違った要素がある。

3) フリートークング

Lafayette の物語がすんでから、それまでの Oral training によって身につけた話す能力、聞く能力で free talking をしてみた。題目はこの物語の主人公 Lafayette の生涯についてであった。結果はとつおいつではあるが自分の思ったこと、感じたことをあるていど述べていたが、その述べるということによって終ってしまい、他の発言に対して自分はこう思うといった討論し合う場面がなく単調なものであった。中に1人で5分も6分もしゃべり続けるものが数人いたが、これらはいずれも外人に英会話を習っているもので、教室英語の言語活動だけで数分もしゃべれるものはなかった。せいぜいで30秒位しゃべるにとどまった。これは必要にせまられるまでは自ら進んで発言しようとする積極性がまだないためであろうし、性格もある。

× × × × × ×

以上によって教室英語の言語活動の問題点を整理してみると、作品講読を英語で進めるのに平行して、ほとんど毎時間生徒による3分間スピーチとその英問英答を行なわせ、聞くことをもっと多く経験させなければならない。その他これに類した視聴覚教材もどんどん入れなければならないと考える。

(資料1) He (the student) must realize that, mature as he is, he is a child in his knowledge of the foreign language. He must try to simplify what he wishes to say, trying to express his meaning as a child would express it...with correct use of uncomplicated structural patterns and a basic general-purpose vocabulary.As he comes to know many more words and expressions, he will, however, be fitting them into appropriate and correctly combined structural patterns, instead of stringing them together in the hope that they will make a comprehensible sentence.

(資料2) One must practice the patterns of the language until he can use them with little or no effort. It is perhaps a greater mistake to think that understanding the rules of the constructions in a language will result in ability to use the language for communication.

(資料3) Test 1

A. Answer my questions in English:- (if necessary, the questions are to be read twice.)

1. In snowy winter of 1765, why did the farmers near Chavaniac fear the strange voice of the very large wild animal ?

(Another class: When the teachers in

Gilbert's School were not fair to a friend of his, he called a meeting of the school-boys. But why did he call meeting ?)

2. Why had Gilbert become one of the richest noblemen of France, though he was still young ? (Another class: When Lafayette was sent to school at Versailles to complete his studies as a soldier, whom did he meet there ?)

B. Dictation in English, and translation:- (must be read three times)

1. It was hard to stop the boy from going out alone with his little sword at his side. (Another class: Lafayette, because he was rich and came from a famous family, was already considered by many ladies as a very good "catch" as a husband for their daughters.)

2. His friends thought that he was a little afraid of other people and not as full of the joy of life as they expected boys of his age to be.

C. Make a free sentence in English by using a given word or word-group:-

1. ...noun+of how.... (Another class:as before.....)

2. ...no better than.... (Another class: agree with... that....)

(資料4)

第一回小テスト	点	1~5	6~10	11~15	16~20	21~25	26~30	31~35	36~40	計
	人数	1	0	2	5	14	28	32	43	125
	%	0.8	0	1.6	4.0	11.2	22.4	25.6	34.4	100
第二回小テスト	点	1~20	21~25	26~30	31~35	36~40	41~45	46		計
	人数	0	4	6	16	44	52	3		125
	%	0	3.2	4.8	12.8	35.2	41.6	2.4		100

(資料5) ㊸の中からの任意の一例

“My Perfect Daily Life” by a boy

I think the senior high school age is the best one to do anything we want to do in life. So I also want to do many things, for example, to make good friends, read many books, make myself strong, etc. But time flies so fast that we never have time enough to do these things completely. And I must study or learn. So I believe not only I but all pupils have to think of how to spend the spare time.

I believe that a man who is in the days of his youth must do two things: (without studying) one is reading books and the other is making himself strong. Youth are incomplete in almost all the parts. In other words, they have a lot of possible future. And that age is the best and the most important age to develop our muscle and spirit. That's why I believe so. Reading books gives us reason. The difference between a mankind and a beast is that he has reason in the former case and not in the latter. Youth often act in a passion, for our heart in young time is susceptible even to foolish things as “A flower has gone”, or “A boy whom I had loved said hello to me”. If we read books, it'll keep down our acts that try to act in a passion. In other words, reading books makes us cool.

If we had not healthy bodies, we could not do anything well. Something that tries to break our health, however, is here and there and everywhere. So we have to pay attention to everything around us to keep health. But it isn't enough to do. We must make our bodies themselves strong. We can do that only when we are young. Old men perhaps can take care of themselves. But they seldom make themselves stronger.

Joining a sport club is one of the best ways that we make ourselves stronger.

And sport clubs give us some companions, and also make our spirit forceful. Some said, “If I joined a sport club, I might have no time or just a little time to study at home.” How foolish! Almost all boys who say such a thing are of weak character. Don't you think it's the wasting of time only to study at the young days which will never return? I don't like such a thing, or such a person.

I once heard a student who had completed the course of his high school a few years ago said, “High school age is the only one that we can do the true study.” I don't think so, but I understand what he wanted to say. That means ‘regret’, I believe. In fact, I also regretted the follies of my junior high school.

Never do people spend their own time without any loss. But we should try to cut short wasteful time.

(資料6) 課題作文の誤りの例 (一部)

- * My best friends is...
- * ...are also many violation of the election law.
- * But some students who is thinking that they have nothing to do with the election.
- * But at first, I have only one hobbies.
It was....., it became one of the...
- * Because there temperature is still...
- * Then I haven't been speaking to her, too.
- * But many arguments for and against these opinion may be in your's heart.
- * I try to write my feelings after finish reading.
- * ..., the result was felt me that...
- * ...strong body is made by to play sports
- * In fact I don't found out that what a honest man is.
- * I have been to there...
- * I sleped two times...
- * People continue to write diaries of life from they are born and till dead everyday

- * After play tennis I am very very tired
- * During I am a student of the...
- * I didn't anything.....I can anything.
- * ...I don't want to be seen so fool by
- * ...we meet many difficulty
- * ...if the friendship is truth, friendship grow better....But it is a very hard to practicing it.
- * Because he didn't composed any short
- * I think you feel this things strange.
- * And men will be died when cars run against men.
- * But she never said nothing for my...
- * Of course Each houses have many ways for any accident.
- * He seems he isn't useful.
- * Some day he become enough old.
- * I am always filled with happy when I remember it.
- * But the most surprised thing that I remember now happened.
- * ...I will be more happy.
- * Just ask what the word means to him.
- * I am not belonging in sports crub now.
- (資料7)スピーチの質疑応答の例 (Male A)

1. What do you think I wanted to say ?
---We must read many books and make ourselves strong.
2. Why is it necessary to read a lot of books ? ---Because it gives us reason.
3. I said there's nothing like youth for making us stronger. But why ?
---Because old men seldom make themselves stronger though they perhaps can take care of themselves.
4. Which is more important, reading books or making our muscle and spirit strong ? ---I said nothing about it.

× × × × × ×

参 考 文 献

講座・英語教授法第4巻：聞き話す領域の指導
石井正之助編 研究社（昭和45年）
英語教育技術：理論と実践

- 田崎清忠著 大修館書店（1971）
指導技術から見た英語教育の諸問題
納谷友一著 研究社（昭和44年）
英語の話し方
国弘正雄著 サイマル出版会（1970）
TEACHING FOREIGN-LANGUAGE SKILLS by
WILGA M. RIVERS The University of Chicago
Press (International Edition, 1970)
English Pattern Practices by Robert Lado &
Charles C. Fries The University of Michigan
Press (1969)
Vocabulary In Context by Harry B. Franklin
The University of Michigan Press (1972)

IV 大学における「言語活動」

1 大学英語教育の目標とカリキュラム

大学、主として教養部の英語教育について1967年大学英語教育学会（JACET）総会における協議会で目的、教材の2部門に分かれて討議された（英語教育学会々報1968, pp13～22）が、この結果は更に大学入試改善を主題とする同学会1970年秋季ゼミにおける小池生夫「大学英語教育の現実と問題点」に明快に要約されている。同報告は中・高・大学の英語教育に一貫性が欠けている現状を指摘した後、大学英語教育の目標として

- 1) Communication の道具としての英語
- 2) 専門分野の学問研究に必要な英語
- 3) 国際人、または一個の自由性をもった人間としての幅広い教養を身につけるための英語

4) 言語使用者としての正しい言語観を身につけるための英語

の4目標をかかげ、具体的な到達目標として

- 1) Reading の level では英字新聞が教養ある英米人の普通で読む、ほぼそれに近い程度に理解できる。
- 2) Writing の level では、自分の意志が論理的に、正確に、ペンが殆んど停止することがなく、自分なりの易しい表現で書くことができる。

3) **Hearing** の level では、英字新聞の内容程度のことほぼ間違なく聞け、その要旨を把握することがほぼ完全にできる。

4) **Speaking** の level では、英字新聞に出ている内容に関して、普通で速度で討議ができる。

を挙げている。ただしこれは現行のカリキュラムでは normal な状態では達成困難として

1) **Reading** の level では、英字新聞の内容が辞書をひかずに大体把握でき、要旨を具体的にのべることができる。(時間的には教養ある英米人の2倍の時間)

2) **Writing** の level では、高校1年程度の教科書の英文が、ほぼ文法的に間違いなく表現でき、単語、表現は、全英連基本単語集に出ている程度のものがかなり使える。要する時間は辞書をあまり使用せず、平易な英語でよいから手をあまり休めずに書ける。

3) **Hearing** の level では、自然な速度で話される英語と内容である場合に、ほぼ内容を理解できる程度。

4) **Speaking** の level では、新聞の内容が簡単な表現で討議できる。そして日常会話では、一通りの表現が使える程度。

とレベル・ダウンをしている。

そしてこの目標を実現するためのカリキュラムの内容として

1) Intensive reading

内容としては、英米文学、英米文化、言語と文化、地域研究、英米風物、地理、歴史、各専門課目の第1段階的のものを系統的に与える。

2) Rapid reading

到達目標に達するためには単語力を現在の10倍位にひきあげる必要があり、日本人にあった専門の速読用訓練教材の開発が必要。

3) Writing

paragraph writing, expository writing, summary writing, theme writing, creative writing などを中心にして、

translation さらにコースによっては step をふんで教材化され授業化さるべきである。それも文法的に正しいというだけの level から、各種文体にあわせて書く訓練が必要である。

4) Speaking, hearing

簡単な会話訓練から雑誌などを教材として、内容の討論にいたるまでの口語表現のコースを考える。hearing についても、簡単な表現からラジオのニュースの聞きとりなど、テープ、L. L. の施設を利用して他角的にとり扱うことができる。

テキストについては、4技能の総合開発が求められ、それも A-V aids と併用できるものがよく、reading 教材のみについて言えば、精読用のほかに本格的な多読、速読用教材の開発が望まれる。writing では和文英訳よりも、むしろ writing の初歩から文体の書きわけにいたる高度の表現まで、4年間に進むことが当然望まれる。

hearing, speaking は、個別分離より総合教材の中でとり扱われる形式が望まれる。

2 I.C.E.(Intermediate)

これは「大学現行教材一覧」(上記会報pp 35~42) 中 speaking, hearing 教材にあげられているが使い方によっては reading, writing にも用いられる総合教材である。

奇数, 偶数の2課で1単元を構成し, 奇数課は

A) Reading text

6~7節, 4~5000語から1課がなり, 内容は言語からはじまって衣食住, 更に交通・通信施設・教育・職業等のことをとり扱っている。

1回目は rapid reading の形式で本を開いたまま録音テープを聞き, やや難解の箇所は日本語で意味を確かめ各節毎に大意をまとめて英語で板書する。2回目は本を閉じて hearing を行ない comprehension check-up (6~7の true-or-false questions) で理解を確かめる。

B) Dialog(s)

text に関連ある 題目を内容とする 自然な対話。テキストを開き口語独得の表現を確かめながら聞き, expression for repetition で重要な表現を真似させる。11課からは text の表現も練習することになっている。

C) Conversation practice

B) より定型化した質問, 応答で, 最初のききとりで意味を確かめ, 文毎の repetition では最初の 1 回は個人別に, 2 回目はクラス全体でくりかえす。

偶数課は Practice and drill lesson で L.L. を使用するが, L.L. にはいる前に全課の内容や注意点を明らかにする。

1) Dialog repetition practice

奇数課の dialog を先ず聞き, 2 回くりかえした後でもう一度聞く。

2) Pronunciation drill

個々の音の発音練習。(Listen repeat)

3) Stress and intonation

所謂「かぶせ音素」についての listen repeat

4) Grammer exercise

文法事項に関する pattern practice. 更に録音されていない classroom practice and homework only という練習問題がある。上記の約15分間の drill が終わった後, 録音したテープを再生して聞かせる。

3 自由英作文

I.C.E. は構造主義の言語学習理論に基づく教科書であるから, 機械的な repetition や pattern practice を主とする学習活動が大部分で, これは特に偶数課に著しい。しかし題材が身近かなものを多くとり扱っているから, 奇数課の a) text, b) dialog, c) conversation practice で練習した表現を利用して d) 作文(約300語)を6回書かせた。

1) a) Lesson 1 Language, Lesson 3

Language Learning

b) —1 “Good morning, Bill. How are

you ?” —3 “Where are you studying English ?”

c) —1 “Are you a student ?”

—3 “What are you doing these days ?”

d) Life in the campus

2) a) Lesson 5 Geography

b) “A friend of mine took a trip to California by car.”

c) “What country are you from ?”

d) Home town

3) a) Lesson 7 Food

b) —a “Pork chops again ! Why can't we have steak ?”

—b “I went to a supermarket for the first time today.”

c) “Where do you eat breakfast ?”

d) Food

4) a) Lesson 9 Shelter

b) “I saw the Johnson's new house today.”

c) “Where do you live ?”

d) My (boarding-)house

5) a) Lesson 13, 15 Transportation

b) —13 a “Does Washington have a subway system ?”

—13 b “How long does it take to go from Washington to Chicago by train ?”

—15 a “Paul tells me that you are planning to go to Europe this summer.”

—15 b “Ticket and passport, please.”

c) —13 “Where do you catch the bus ?”

—15 “Do I have to check all my baggages ?”

d) Transportation around us, or Trip.

6) a) Lesson 19 Writing and Printing

b) “I'm looking for something to read on the plane.”

c) “Do you read the newspaper

every day ?”

d) Favorite books, newspapers, etc.

4 Speech and conversation

宿題に出した作文を基にして次の時間にL. L.を使用して以下の会話練習を行う。

1) 学生2人(A, B)を1組として各組毎に作文を交換して相手の作文を点検, それについて質問10を作る。(質問は後に解答を書き入れる為に余白をおいて書く。

2) 作文を相手に返した後, 先ずAが自分の作文を読みBの質問に答える。次にBが自分の作文を読み, それに対するAの質問をうける。

3) お互に質問用紙を交換し, 録音された自分の答えを聞いて相手の質問の下に記入する。

4) 質問用紙を返してもらった後, 作文と一緒に提出する。

5 結果の検討

1) 文法の誤りについては J. C. Fischer, *Linguistics in Remedial English* (Fと略称) をモデルとして1, 3, 5回目の学生の

作文(S-1, S-3, S-5と略称)を比較した。(表-2) Fは State University College at Oswego, N. Y. 1961年春季1年生の英作文特別学級(学生22名)を実験グループとして各学生に約300語の作文を2回作らせ計10,000語における文法上の誤りを分析した。この結果に基づき重要な構文の文型練習を16週行った後 co-operative English Test, Mechanics of Expression, Form T でテキストを行ない, 最初に行なった同形式のテストの結果と比較したところ平均点44.00から50.14と6.14と成績が向上した。これを従来の文法中心教授の統制グループの成績40.36から44.79と4.43の向上と比較すれば成績の向上が著しいというものである。S-1, S-3, S-5は40名の任意の同一学生の10,000語の作文からFと同一のモデルでその誤りの数を調べた。表-2は誤りの多い項目順に並べたものである。なおS-3を書く前にS-1, -2の主要な誤りを指摘し, S-5の前にはS-3, -4の誤りの外 pronominalization や文の構造の複雑化について説明した。

(表-2)

F	S-1
1 Verb tense & sequence 56=33-23-	1 Article 113=3-110- (1=1-)
2 Run-on sentence 52= -52-	2 Verb 72=38-34-
3 Faulty parallelism 32= 7-25-	3 Plural 63=63-
4 Preposition & sentence group modification 27= 2-14-11	4 Modification 57=-50-7 (11=-4-7)
5 Errors in plural 20= 20-	5 Adjective-adv. 40=12-7-21 (3=2-1-)
6 Errors in possessive 19= 19-	6 Comparison 16=10-4-2
7 Lack of pronoun agreement 19=19-	7 Parallelism 12= -12-

8	Adjective-adverb	15=12— 3—
9	Subject-verb disagreement	14= 14—
10	Faulty comparison	11= 4—7—
11	Sentence fragment	10= —10—
12	Article	5 = 5—
Total		280=135—134—11

S—3

1	Article	122= 8—113—1 (8 = 8—
2	Plural	68= 68—
3	Verb	62= 24—38—
4	Adjective-adv.	53= 8—11—34 (7 = 1—6—
5	Modification	42= —32—10 (16= —6—10)
6	Parallelism	19= —19—
7	Subject-verb	16= 16—
7	Pronoun dis.	16= 16—
9	Run-on sentence	21= —21—
10	Comparison	11= 5—2—4
11	Possessive	8 = 3—5
12	Sentence frag.	6 = —6— 444=148—242—54 (258=141—98—19)

8	Run-on sentenec	14= —14—
9	Subject-verb	11= 11—
10	Pronoun dis.	8 = 8—
11	Possessive	5 = 1—1—3
12	Sentence frag.	3 = —3—
		414=146—235—33 (219=134—73—12)

F—5

1	Verb	54= 42—12—
2	Article	45= 2—43— (2 = 2—
3	Plural	45= 45—
4	Adcjective-adv.	32= 13—5—14 (2 = 2—
5	Modification	31= —31— (4 = —4—
6	Possessive	21= 3—7—11
7	Subject-verb	8 = 8—
8	Pronoun dis.	6 = 6—
8	Comparison	6 = 1—3—2
8	Parallelism	6 = —6—
11	Run-on sentence	5 = —5—
12	Sentence frag.	1 = —1— 260=120—113—27 (160=109—38—13)

Note—1 Fischer はこのモデルとして R. C. Pooley : Teaching English Usage, 誤りの基準として A. H. Markwart et al : Facts about Current English Usage 等によっているという。

- 2 表中の第1の数字は計, 第2の数字は語形変化の誤りの数, 第3の数字は機能語の誤りの数, 最後の数字は語順の誤りの数を示す。
- 3 () 内の数は Fischer の誤用の基準だけによる誤りの数を示す。
- 4 余白の関係上, S—1, —3, —5の項目の名前の1部を短縮した。

2) FとS—1とを比較すると総数で280~414とS—1が圧倒的に多いが, 語形変化の誤りは135~146とあまり相違がなく, 語順は11~33とやや差があり, 機能語は134~235と大差がある。この最大原因は Article が5(=5—)~113(=3—110—)と違うため, これはFに誤りが少ないというだけではなく, Fではa—anの用法の誤りだけを問題にしているに対してS—1では形ばかりでなくもっと広い範囲の冠詞の用法の誤りを抜かっている。このような誤りの基準の相違は Adjective-adverb の15(=12—3—)~40(=12—7—21), Modification の27(=2—14—11)~57(=—50—7)にも見られ, S—1におけるこれらの誤りをFの基準にあわせると表—2の()内に示したように Article (1=1—), Modification (11=—4—7), Adjective-adv. (3=2—1—)となり, 合計も(219=134—73—12), 語形変化, 語順もFの135—, —11と殆んど相違がなく, 機能語では134~73とFがかえって多い。この相違は Run-on sentence で52(=—52—)~14(=—14—), Faulty parallelismで32(=7—25—)~12(=—12—)等によるものである。これは話し言葉がそのまま書き言葉に持ちこまれたためであろう。この特徴は誤りの順位にも見られ, 上位5の中, Fでは2.Run-on sentence, 3.Faulty parallelismと続き, S—1では1.Article, 5.Adjective-adv.で, 共通のものとしてFでは1.Verb, 4.Modification, 5.Plural, S—1では2.Verb, 3.Plural, 4.Modificationとなり, 同じ4.Modificationでも27(=2—14—11)~57(=—50—7)と前置

詞の誤用を含むS—1がはるかに多い。

3) S—1とS—3の比較では, S—3を書く前にS—1の誤りの注意をしたにもかかわらず合計で414~444, 特に機能語と語順で—235—33~—242—54とわずかながら増えている。機能語で増えた原因として不用な冠詞をつけたものが3~26(S—3は題材がFoodで食事や食物の名に多く冠詞をつけた)で急増したが, Modificationで前置詞の誤用が少なかったため微増にとどまった。語順の増は Adjective-adv.でA lunch, 11 classといった日本語的語順やboarding house mealといった無理なcompoundingが0~13と増えたのが主である。要するにこの段階で基本的な文法事項について注意したが, やや具体性を欠いたため十分に実行されなかったり, 注意事項以外の誤りが現われたと見られる。文法事項の誤りの順位も上位5位まで同じで僅かに2と3位, 4と5位が入れ代っただけで期待程の進歩は見られなかった。

4) S—3とS—5の比較では合計で444~260と約40%近く減り, 機能語でも242~113と半減, 特に Article 122~45と著しく, その他 plural 68~45, Adjective-adv. 53~32, Modification 42~31等がこれに次ぐ。文法事項別の順位も前2回トップの Article が2位となって Verbが首位, 残りはS—3と同順位である。

5) 以上文法事項ではS—1, S—3であまり変化がなくS—5でかなりの進歩が見られるが, 同様のことは文体, 例えば文の種類・長さでも見られる(表—3)

(表-3)

	S-1			S-3			S-5			I. C. E.		
	文の数 (%)	単語 の数	平均 語数	文の数 (%)	単語 の数	平均 語数	文の数 (%)	単語 の数	平均 語数	文の数 (%)	単語 の数	平均 語数
不完全 文	7 (0.9)	95	13.6	21 (2.6)	236	15.1	13 (2.0)	185	14.2			
単文 1	351	2,744	7.8	334	2,818	8.4	213	1,899	8.9	220	2,934	13.3
” 2	76	878	11.6	46	524	14.6	58	777	11.7	88	1,466	16.6
計	427 (53.0)	3,622	8.7	380 (49.4)	3,342	8.8	271 (40.8)	2,676	9.9	308 (53.6)	4,400	14.3
重文 1	94	1,540	13.4	99	1,605	16.2	75	1,297	17.3	66	1,496	22.6
” 2	34	973	28.6	39	1,110	28.5	51	1,347	26.3	8	180	22.5
計	128 (15.9)	2,513	19.6	138 (18.0)	2,715	19.6	126 (18.7)	2,644	20.5	74 (12.9)	1,776	22.5
複文 1	216	2,997	13.7	201	3,025	15.5	233	3,787	16.4	178	3,520	19.8
” 2	29	773	26.7	30	682	22.7	29	708	24.4	14	404	28.9
計	245 (30.2)	3,770	15.4	231 (30.0)	3,707	16.0	262 (39.0)	4,495	21.0	192 (33.5)	3,924	20.4
合計	807	10,000	12.4	770	10,000	13.0	672	10,000	14.9	574	10,000	17.4
重文 2	279	4,743	17.0	270	4,817	17.8	313	5,842	18.7	200	4,104	20.5
+複文	(34.6)			(35.2)			(46.6)			(34.8)		

注 単文 2 は verbal, 重文 2 は複文, 複文 2 は重文をそれぞれの文中に含むものを指す。

S-1, S-3, 各々の10,000語における文の総数を比較すると807~770, 1文の平均語数は12.4~13.0語であり相違がない。又文の種類も単文53.0~49.4%と減った部分が不完全文0.9~2.6%, 重文15.9~18.0%と増えただけで複文では30.2~30.0%と殆んど変化が見られない。P. G. Perrin, *Writer's Guide and Index* によれば general English の1文の平均語数は約20語 (p.16) で、文の種類も単文が全体の1/3, 重文が約1/6, 複文が1/2とのことである。(pp 281-283) S-5を書く前にこれに注意したところS-3とS-5とでは文の総数で770~672, 平均語数で13.0~14.9語と general English に近ずき、文の種類でも標準に近く重文で18.0~18.7%と殆んど変化がないが、単文で49.4~40.8%, 複文で30.0~39.0%とかなりの増加が見られた。同様のことを I. C. E. の text で見ると、文の総数が577, 平均語数が17.4とS-5に近いが、文の種類では単文53.6%, 重文12.9%, 複文33.5%とS-1, S-3に近く、単文と複文の割合が標準と大体逆になっている。〔これは I. C. E. の text がきき方の練習に使えるように書き言葉よりむしろ話し言葉のレベルで書かれていることを示すものであろう。学生の作文が会話の材料として書かれ speech にも使われるのであるから強いて複雑な文でなくても I. C. E. や S-1, S-3 程度のものでよいのかも知れない。

6) 作文の目的による分類, すなわち自分の経験を話す叙述文, やや客観的な説明文という見地から学生の作文を見ると, S-1では39~1, S-3では38~2と圧倒的に叙述文が多いが, S-5では題材 (Transportation) の影響もあってか31~9と説明文がかなり増えている。S-1, S-3の1文の平均語数がそれぞれ12.4, 13.0語に対してS-5, I. C. E. が14.9, 17.4語であるのはこれが原因になっているのかも知れない。

6 作文と会話の実例

1 学生による S-1, S-3, S-5 の作文と, S-5 に基づく会話の1例を示せば次の通りである。

Life of Campus

As a university student I live an academic life freely. I can pleasantly receive lectures in the big building furnished with modern conveniences, such as faculty chair and desk, library, television set, tape-recorder.

With my good fellows I talk about study, current topics and circle activity, then sing folk songs merrily on the green lawn in the campus. Sometimes we do so over a cheerful glass at the lodge. At such a night I have nice time and sit up late. Then as a natural result of the last night, tomorrow morning I am to be late for lecture. But I am so serious that I am hardly away at lecture. Against my will teachers are frequently away as it were very natural.

After having lectures, I eat lunch at my service. Then, I heartily feel that it is very lucky to enjoy a life of campus. I owe it to my parents what I am. But there is some problems in this campus. It is natural that a student secure truth. At the same he must discuss problems of how to solve contradiction of his society and prevent war. But it is needless to put a clumsy helmet on. As students who secure truth and should keep in touch with scientific activity of the world, we must keep our head cool. At last I must not only study but also try to improve my campus and society.

To my wonder, in my campus there is a energetic lump of youth, which strongly products something new.

Food

I was born in a farmhouse. So I have never wanted for food. Each season certainly presented me many kinds of fresh fruits and vegetables. Freely I was able to eat a sweet potato, a persimon, an apricot, a potato, a chestnut, a pear and a Japan medlar. With my sisters, looking at a sky aglow with the setting sun, I ate them as much as I could. That is one of my best memories in my childhood.

I think it is very envious to those who live in a town and must buy any foods, Now the longer I have lived in town, the more clearly I know the advantage of a farm. A vessel of rice, which cruelly cost me 30 yen always dearly reminds me of the yellow ripe ears in the field of my village.

Long ago a horse or an ox plowed a field and a farmer sowed seeds. Then, thanks to God, he harvested with a sickle. Yes, foods were certainly products of the nature and the farmer's sweat. But ours is truly a scientific age.....It is machinery and artificial fertilizer that have advanced agriculture. But it is a great pity that the welfare of mankind does not necessarily correspond to the advance of science. but that the opposite is often the case. If something which enriches human life is called culture, what shall we call "public hazards" which plunges a man in a moment into a bottomless pit of misery? Under the economic system which is called capitalism, even our foods are exposed to the terrible danger.

Yes, I must say just now, it is only by uniting our efforts that we can secure the best living conditions. Can we not

say that the very efforts consistently made to eliminate evil and misery are a test of the level of the nation's civilization?

Transportation

When I go back from my lodging, tired with a lot of seminars and being anxious to enjoy a quiet life in my country away from noisy city Kanazawa, I can use a few transportation according to purpose.

At first I go to one of bus stops which are near my lodging. I think that today the most developed and easiest available transportation for citizen is a bus-system. There is bus service everywhere I want to get, I only have to wait next one which is to come in a few minutes. Recently bus service has made remarkable progress, and there is hardly any limit to its advance in future. though the number of private-cars has remarkably increased. It depends upon our use whether it will advance or not, Because every year's rise in fare gives many people of the country irrespective of their region, a decisive blow. We can't deny that there is a limit to fare we are able to pay, no matter what progress the standard of living make. We always feel that there is an infinite race between our salary and fare.

When I get to the station which is filled with many people who think that nothing is pleasanter than travelling, for the most part a train already waits for me. Once I rode past my destination while thinking of a thing in the awfully crowded train. When I return to what I am, though I always look like absent-minded, I could find the plate of my

destination nowhere. Because it was very comfortable to ride in.

I never take a taxi if I can help it, for one should live within one's means. We, students are rather badly off in transportation owing to the high cost of living, therefore we must try to use cheap bus service in any chance.

1 What are you thinking when you go back home?

—I think a quiet time in my country.

2 What do you do at first when you go back home?

—I walk to a bus stop.

3 Why do you think the most developed and the most easily available transportation for citizen is a bus-system?

—Because bus fare is cheap and be able to use easily.

4 What does the advance of bus service depend upon?

—It depends upon our use very much.

5 When you get to a station, is the station crowded?

—Yes, it is.

6 Can you get on a train at soon?

—Yes, I can do perhaps.

7 Why did you rode past your destination?

—Because the train was very comfortable and I was thinking of a thing.

8 Why do you never take a taxi?

—Because I think man should live within one's means.

9 Where do you get off a train?

—I get off the train at Nagoya.

10 How do you come this university?

—I walk to the university for twenty minutes.

7 今後の問題点

1) I. C. E. の text と学生 の作文 の 題材 は大体共通であるが、前者は問題を歴史的に説明するに対して後者は個人的な経験を記述する、又 Dialog は学生 の作文 より colloquial であるが米人の生活体験に基づいている。つまり学生 は text と dialog の表現と語いを利用して自分の文体で経験を述べる訳であるが、その経験も各自異なるはずである。しかし実際には共通点が多く例えば S-1 では金沢大学とその環境、講義の内容やそのつまらぬこと、クラブ活動の意義とその実際、学生運動の評価、友人や学外の生活が主である。これらの中には text や dialog に見られない語い、表現を用いなければならず、diction の誤りの大きな原因になっているからこれら共通表現の glossary を作れば有効であろう。又今回は自分の経験をのべる叙述文が主であったが、何時、どのように説明文に移行してゆくかは1つの重要な問題である。

2) Perrin は作文点検の要素を次のように分類している。(pp 273~)

a) Revising sentences

i) revising to meet the reader's expectation

ii) revising to make sentences effective

b) Revising words and phrases

i) revising to meet the reader's expectation

ii) revising for effectiveness

a) b) とともに i) は conventional or grammatical なものであり ii) は stylistic なものである。更に a-i) は syntax に、a-ii) は rhetoric に関するものであり、b-i) は morphology、b-ii) は figures of speech に関するものである。Fischer の基準は a), b) のそれぞれ i) に当たる部分を構造主義の立場から規定したものであるが、初歩的な学生 の作文 といえども少くとも a-ii) の stylistic な基準がなくては十分に点検出来ない。変形文法では optional transformation で文体を説明しようとして

いるが (Jacobs and Rosenbaum, *Transformations, Style, and Meaning*, Chap. 5) 学生の作文に適した具体的なモデルを設定すべきであろう。

3) 文法の誤りを少なくするために Fischer の項目に従って主要な間違いを分類しクラス全体に注意したり、添削してかえした作文の各人の誤りを項目別に整理させたりした。

Fischer は学生の誤りを基にした文型緩習の問題を作って効果をあげたというが

(Appendix A) その内容は

- Lesson I The past tense of the verb
 II The preposition group as a modifier
 III The sentence group as a noun modifier
 IV The because/sentence group (sentence fragments)

と誤りの上位を占める Verb tense & sequence や Preposition & sentence group modification に関するものである。I. C. E.

では Practice 4 Grammar exercises で, b, c, の3つの exercises をもっているが, 数の多い項目順に並べると (括弧内は録音された a 内のもの

- | | |
|---|--------|
| i) Verb tense & sequence | 26(11) |
| ii) Preposition & sentence group modification | 5(1) |
| iii) Adjective-adverb | 4 |
| iv) Comparison | 3(1) |
| v) Article | 2 |
| vi) Pronoun disagreement | 1 |

と大体 Fischer の練習問題に似ている。日本人の学生に多い article や preposition のような機能語の用法や plural の誤りを直すためには所謂「日本人向き」の練習問題を使用することも1法であるが, text や dialog によって具体的に例示するのもよいのではないか
 4) L. L. では100分かけて speech と会話の練習をするのであるが, 先づ第一に相手の作文の点検と質問作りにかかなりの時間が

かかる。特に誤りの点検には辞書をひいたり議論をしたりするので一層暇どるらしい。又質問を作るのには I. C. E. に Conversation practice という手本があるにもかかわらず, 極端なのは時間一杯かかっても10問できない者がいる。このように最初は無駄な時間をかけるようではあるが, 学生が自分のペースで相手と協同で学習ができることは, 従来の教師主導の機械的な個別学習に対するもので, 他学科の laboratory の用法に近いことができるのは一つの前進と見てよいであろう。又現在はすべて下書きをもってやっているのであるが, 将来上手になれば下書きなしでできることが期待される。又こうして録音された音声をどのようにチェックするかも問題である。現在はすでに練習を終ったものから逐次教師がきいたり, 放課後録音テープを1部ずつ点検したりしているが有効な方法はまだ確立されていない。又現在の L.L. のシステムで学生同志が如何に点検しあうかも問題である。

1967年大学英語教育学会総会協議
 会記録 (大学英語教育学会会報 1968)
 大学の現行教材一覧 (同上)

- 小池生夫 大学英語教育の現実と問題点1970
 J. C. Fisher, *Linguistics in Remedial English* 1966
 P. G. Perrin, *Writer's Guide and Index to English*⁴ 1965
 R. A. Jacobs and P. S. Rosenbaum, *Transformations, Style and Meaning* 1971

VI むすび

1 「言語活動」に聞く話す, 読む, 書くのいずれの領域にもできる訳であるが, 我々が主として取りあげたのは書く領域であった。書く前には勿論聞き話し, 読むの活動が行われ, 高校・大学の場合は更にこれを土台にして speech や conversation を狙っている。これらの作文はいずれも complete commu-

nicationのうちには入るものであるが、文字通り完全に自由であるとはいえない。特に中学の場合は文型や単語に制限を加えたり、対話の view point をかえて叙述文を書いたりするし、大学の場合も text や dialog の題材と同じ作文を書かかせている。この点単に題名に既習の単語を用いる高校が一番自由なのかも知れない。このように制限の差はあるにせよ complete communication Ⅰで一応の成果をあげその分析の結果今後の方針もたてられている。ただここで問題になるのは活動の期間と積みあげが少ないことである。一番長い大学にしても半年で6回の作文であるから、将来は少なくとも1年間にわたってその経過と結果を見なければならぬ。他方聞き話す領域では中学は全然手がけていないし、高校・大学も1歩ふみ出した段階にすぎない。伝達手段が音声であることが作文よりも取りあつかいを困難にし結果の分析も全然行われていないが、今後L.L.等を利用して学生の話し言葉の種々の相が研究され指導に役立たせたい。

2 教材は中学はTV放送、高校は副読本、大学は聞き話すための教材であるが、このような「言語活動」は他の教材でも行い得る。例えばリーダーの場合も身近な題材の場合にはこれに関する生徒の経験を書かせて話しは出来るし、説明文の場合でも要約を書かせそ

れを基礎にして簡単な討議はできる。英作文も上級の内容を中心に編集されたものは適当な題材であれば作文—会話の「言語活動」はできる。これら種々の教材における自由な「言語活動」は今後の課題としてて実地研究が必要である。

3 評価について中学では作文の文の数が少ないので、指定された文の数や文法的な誤りの数によつて4～5段階に分けて評価している。高校では、思うこと感ずることを節を使って簡明に書きあげたものを②、やや劣るものをa、普通と思われるものをb、劣っているものをcと4段階に分けているが必ずしも規準が明確でない。大学の場合、内容・形式の2に分け、後者は文や語の用法、前者では作文の長さや論理性の観点から大部分をb、ややすぐれたものをa'、すぐれたものをa、やや劣ったものをb'、劣ったものをcと5段階に分けて評価したがこれも極めて便宜的である。問題は用法とか論理性をどのような具体的な規準できめるかということであり、評価に対する学習者の強い関心から見ても早急に解決すべき問題である。

要するに我々の「言語活動」は書き方で一線に並び、ここには教材・評価等の問題があり、きき方話し方に一步を進めるためには音声にとまなう更に多くの難問があるというのが現状である。